

言葉の重さ

『カール・ヴィッテの教育』といふ本は、九歳でライプチヒ大学に入学して四年間、数学を専攻し、十三歳で素晴らしい論文を書いて哲学博士の学位を獲得、続いて法学を専攻して十六歳の時に法学博士の学位を獲得すると同時に、ベルリン大学の教授になったカール・ヴィッテの父親が著述した本である。

父親の名前もカール・ヴィッテであった。彼はドイツの片田舎に住む牧師であったが、当時の人々が誰一人として考へてゐなかつた「幼児教育の重要性」とりわけ「言葉の教育の重要性」を深く信じてゐて、これを自分の子に実践した人である。

彼は、日頃「子供を早くから教育すれば、たいていの子供は非凡な人間になれる」と主張してゐたが、当時の人たちは誰もその言葉を信じないばかりか、さういふ彼を馬鹿にさへしたので、それを人々に実証して見せるために、わが子に自分と同じ名前を付け、これを育てて見事に成功し、自分の日頃の主張を実証したものである。

然しながら、それでも世間の人々は彼の主張を信じなかつたのである。「カールは生れつきの天才だったに決つてゐる。さうでなくて、九歳で大学に入れる訳がないではないか」さう言つて、人々はこれを教育の

結果であるとは認めなかつたのである。

私などは、自分の実践もあるせいかも知れないが、ヴィッテの教育論に一点の疑念もなく信ずることが出来るが、世の中の多くの人々はどうしてこのやうに“信ずる”といふ気持が持てないものであらうか。私は不思議に思ふと同時に、実に残念でならない。孔子の「信無くんば立たず」、世の中で最も大切なものは“信”である。「これが無かつたなら世の中に生きる意味が無い」といふ言葉の重みを、今つくづく私は感ずる。

『カール・ヴィッテの教育』といふ本は、一八一四年、息子のカールが十三歳で哲学博士になって国中の評判になった次の年であるが、かの有名なペスタロッチの強い奨めにより、カールに対して幼児期に行つた教育法について父親のカールが書いたものである。

父親のカールは、自分が子供に施した教育法を本にすることを嫌つてゐたのであるが、「それは人類にとって貴重な、ぜひとも必要な仕事なのだから」と言つて、ペスタロッチが強く懇請したので、断り切れずに著述したものであると言ふ。